
島

Rash

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

島

【ZPDF】

Z9783D

【作者名】

Rash

【あらすじ】

何故か今世紀まで誰にも発見されなかつた島に調査隊がやつて來た。その島に関連して様々な奇怪な出来事が起こる。そして調査隊は・・・記念すべきRashの作品第一弾。楽しんでいつて下さいね

第一部、追う者。

「霧が晴れない・・・」

甲板の上に痩せた男と小柄な女がいた。男の方は生地のしつかりした服を着ており、片足重心で貧乏振りをしている。女の方は青いコートを羽織つていかにも『私は船長』みたいな帽子をかぶっている。声を発したのは女の方だ。

「まるで島が俺等に見つかりたくないようだ」

瘦せてはいるが、深みのある声だった。

「で、どうなんだい今回のは。」

女が島を顎で示して言った。男は深い溜息をついて疲れた顔で島を見、しばしの沈黙の後、口元だけ、にやつと笑った。

「なかなか面白いと思うな。この付近に新しい島があるなんて知らなかつた。そもそも今回の情報は何人かの漁船の船員と同船長によつてもたらされたんだがな。面白い事にソナーが全く効かなかつたのだよ。幸いにも他国の軍事衛星が協力してくれたが。」

この島の周りには鋭く突き出した岬が点在しており、下手に近づくと船ごとへし折れる可能性がある。一日前に上陸を試みたがこの通り濃い霧で包まれてどうにもならない。

男の名前はロキュアート。万能な男で冷静を保つ事が出来る人間である。女はこの調査船『ハルバット』の船長でヘリングという。二人は調査隊の研修生時代から交流があり、船の出動が必要な時はい

つも彼女に頼んでいる。

船には他にも船員や、見慣れぬ格好をした男女がいた。

眼鏡をかけたキザそうな男、医者のエスカー。

格好の良いスーツを着た薄くヒゲを生やしたダンディな男、コックのマーシュ。

シャツを着た男、通信手のマッカール。

酒を飲んでいる強そうな男、地理のジンと女、自然のオルガノ。

眼鏡を掛けた静かそうな女、工学のクローヴ。

・・・皆個性的だ。眼鏡の彼女、クローヴはノートに何かを書いている。何かの観察日記らしいが詳しくは見えない。キザ男、エスカーはさつきから呪文のように何か唱えながら刃物や液体の入った瓶を整理していた。突然、酒を飲んでいた男、ジンが酒で口を漱いで天に向かって吹き出した。

「これでも喰らえ霧！俺様から酒の贈り物だ！機嫌を直して晴れろ！」

それを見た女、オルガノが真似して酒を吹き出した。

「そうじや（そうだ）！」「りえでみょくじやえ（これでも喰らえ）霧！！」

と言つてゐると、願いが通じたのか不思議な事に霧が段々と晴れて

来た。太陽の光を受け、眩しそうな顔をしてヘリングが言った。

「良かつたじやないか晴れて。・・・ 気味の悪い晴れ方だけど」「いや、そつとは限らない。未知の島に上陸するんだ。未知の島つてのはいかんせん情報が少ないからな・・・」

ヘリングは船室に入つていき、『ハルバット』の通信手の『デュロックを呼んだ。デュロックとマッカレルは同じ地区で育つた仲で親友を超えた関わりがある。親同士でも仲が良く、食事も一緒にすることが多い。その時もちょうど二人は通信室で食事を摂りながら囲碁なんぞをやっていた。

「デュロック！と、そのお友達w。調査隊が上陸するよー『デュロック！HQに連絡入れなー今から上陸するとなーで、『氣をつけてね

マッカレル君』

船長が去つてから『デュロックがマッカレルに、

「氣をつけるよ相棒。未知の島に未知の海域つてのは格好の魔の隠れ家だからな。また帰つたら家で食事するだろ。」

と言つた。マッカレルは僅かに拳を震わせて通信室から出て行き、追つよつよつに『デュロックが通信室から首を出して付け加えた。

「それと、いつもの事だが船長には氣をつけなー何があつても知らねえからなー！」

甲板では島に上陸するためのゴムボートの準備をしており、ジンがゴムボートの栓をくわえて一生懸命に息を吹き込んでいた。酒を飲んだ後なので周りが酒臭い。

「酒気を吹き込んでいいんですか。」

クローヴがロキュアート隊長に訊いた。

「アルコールでは沈まんよ。それよりオルガノの方が心配だ　まさか死んでないよな？」

オルガノは甲板に大の字になつて寝ていたのだった。

調査隊の七人を乗せたゴムボートは島に向かつてゆっくりと進んでいる。

「今日はいい天気だな。」

酒気をゴムボートに吹き込んでギンギンに冴えたジンが言った。

「いーや、いい天気の後は必ず嵐が来るつ！」

今まで酔いつぶれていたオルガノがむづくり起き上がって一言叫ぶと、また寝てしまった。

「まあ、氣をつけるに越した事はない。」

エスカーは島の全体像を暗記しつゝ言い、一方でボートを漕ぎつつマーシュが島にあつたら良いと希望するものをつぶやく。

「鳥がいたらいいんだがな。」

「今のところ電波は良好。何ら支障ありません。」

「目標は北北東の方向。少し面舵を切ってください。」

マッカレルとクローヴはきちんと仕事をこなし、舵取りのマーシュに指示を出した。

「了解つ。」

そんな会話が続いた。それを聞きながら、ロキュアートが思い出したように『ハルバット』に向かつて、人差し指を天に突き出す。すると、それに気づいたヘリングが両手を大きく振つてそれに答えた。

「大丈夫かほんとに。風が怪しいぞ。」

ロキュアートが苦笑いをし、視線を元の島に戻した。さらに航海（？）を続ける事10分、いよいよ例の鋭く尖った岩の近くに来た。ここまで来れば上陸あともう10分位で出来る。と、クローヴがにわかに声を上げた。

「隊長、羅針盤が・・・」

皆がその羅針盤を覗き込んで、その奇怪な現象を見た。羅針盤が踊っている。

色々な方向を一度に示そうとしてビリビリと震えたり完全に一回転したりと大変な状況になつている。

「そうだな、メスが磁気を持つたようだ。」

エスカーがメスや注射器の針をかち合わせて諦めたような顔をした。

そりに「マッカレルが報告。

「電波強度悪い、通信が途切れがちです。」

確かに通信機からは雑音が聞こえてくる。いつも悪い事が立て続けに起ると普通はパニックに陥る所だが、彼らはプロであり、通信機が壊れる事なんてよくある事であるし、羅針盤は・・・

「どうやらこの尖った岩の所為ですね。磁気を持つ磁石なんでしょう。どうですかオルガノさん？」

しかしもはや彼女には回答する能力がなかつた。

「そうだな、良いんじゃないか、そのままでも。」

マッカレルは同期のクローヴに言つた。確かにそうかもしれない。こう話している間に、もう島に上陸出来る所まで来た。こうなればもつ羅針盤はそれほどナセサリイではない。

「まあ行こう。未知の島へ！」

ロキュアートが景気付けに一言叫んだ。もはやこの調査隊を止める者は誰もない。

ゴムボートを陸に揚げ、全員荷物を持って島に降り立つた。ここから数日間に及ぶ調査が始まる。

「とりあえず

ロキュアートが肩の荷物を降ろす。

「本部を設営しよう。もつそろそろ夕暮れ時だ。そうなつたら暗くなるのが・・・」

「隊長！」

マーシュが叫んだ。その肩にはオルガノが載っている。

「オルガノさんまだ醒めてませんが？」

ロキュアートが何かを示唆するように「うくりとうなずいた。マーシュの目がキツくなる。

「・・・いいんですか？」

ロキュアートがもつと強くうなずいた。肝を据えたマーシュが懐から赤い瓶を取り出し、オルガノを浜に降ろすとその瓶の口を彼女の口に押し付けた。すると今までゆらゆらとしていたオルガノの瞳孔が一瞬全開になり、また一気に縮小した。

「……ツツ！……くつ！……かはつ！…」

奇妙な叫びをあげると体をのけぞらせ、そのまま浜に突つ伏した。

「いいかオルガノ。今度動かなくなったら死体として処理するからな。」

ロキュアートの言葉に皆笑った。唯一本人は涙目まま苦しそうな息づかいだったが。

やがて調査隊は歩き始めた。夕方4：00。早くベースキャンプを設営しなくては彼の言つ通りあつといつ間に真っ暗になってしまふ。が、その心配はそれほどいらなかつた。直ぐに岩場の良いキャンプ地を見つけた。そこは海に面した洞窟になつていて海水は洞窟の半ばまでを満たしている。奥は乾いて柔らかい。

「オルガノ！早くテントを張れ。いつまでも酔つてんじゃねえ。」

テント係のオルガノにジンが怒鳴りつけた。やられた相手もそれに反抗する。

「自分も飲んでたくせに他人ばかり口出してんじやないよ！」「違う。いつまでも酔つているのが悪いと言つていいんだ。」

「今は醒めているでしょ！アンタは黙つて仕事しどきなさいよ！いつも自分のこと棚に上げて何がいいたいの！」

「上げてねえ。」

「嘘つくな！腐れ地理オタク！」

今回はジンが全てを飲み込んだ。石を壁に叩き付けるとそのままどこかに出て行つた。

「・・・隊長？」

クローヴがロキュアートにわざやいた。彼がこつちを見る。

「岩と海水の境目を見てください。泡が出ていますが何なんでしょう？」

確かに細かい泡が岩と海水の境目から出ている。

「面白いな。明日オルガノかジンか、どちらかに調査を頼もう。」

クローヴはうなずくと、また仕事を続けた。

「・・・雨だ。」

エスカーがつぶやいた。

「シケるな。」

その夜、豪雨の中、岩窟で隊員は食事を摂りながらそれぞれ自由に過ごしていた。

『・・・』ひちゃ、スゴいよ。船が縦横に揺れて。しかも霧が出て来て視界2mときた。』

「だから大丈夫かと言つたんだ。言わんこひちやない。」

例のようにロキュアートとヘリングが通信をしていた。

『ひむ、それじゃうちのテコロックが話したいって。』

そういえばマッカレルも話をしたそうに火のついたお香を持って後ろでうぶうぶしていった。だがお香から何故か煙がうまくたたないようだ。

「おひ、やつだつたか。じゃ、また。」

話かわつてその他の調査員。

エスカーは静かに音を立てずに食事をしている。他人にはあまり干渉しない性格が出てきているのだ。クローヴも上品に少しずつ食しており、マーシュは格好良く座り込んで華麗な仕草で食べている。

「オルガノ、それを取ってくれ。」

ジンが醤油を指差した。オルガノは動かない。

「おい。」

反応がない。ジンが身を乗り出してせりに声をかけよつとすると

「自分で取れば？太つてもいいならあたしが取るけど。」

固まつたジンにせりに言葉をかける。

「酒飲みが動かないとどうなるか知らないでしょ。どうせ太つて倒れて・・・」

「おいー。」

ジンがものすごい勢いで立ち上がり、皿もその他の食器も口下に落ちた。

「いいかげんにしろ！いつまで根に持つてんだ！ハッ当たりしてんじゃねえ！」

しかしオルガノは気にせず続ける。

「じゃあ最初に自分の事を直しなさいよ！あんた自分が完璧な人間だと思つていい訳？冗談じゃない！行き先も言わずにいきなり電車降りて『何してる、早くしろ』って言つてんのは誰！？他人の意見も聞かずに無理だ無理だと言つてるのは…？誰かが仕事してる時にふらふらと…」

ジンがオルガノの食器その他を一払いにして首に掴みかかる。凄まじい音が洞窟にこだました。

「てめえこそどうなんだ！他人に迷惑かけてんのはてめえも同じだらづ…俺だけじゃ…」

と言つた所でクローヴがほとんど体当たりで二人の間に割つて入つた。

「止めて下下さい！何て事しているんですか！」

しかしじぢぢらもひどく興奮して止まる気配が無い。マーシュもマッカレルも心配そうにじぢらを見ており、エスカーだけ気にせず食事をしていた。

「止めて下下さい…・・・ジンさん、ひどいですよ！場をわきまえて下さい！」

「そうだこの莫迦！」

その時、ジンの何がが切れたらしい。今まで溜めていた何がが、力を持つた地震の様に大きな破壊力を持ち、一気に爆発してしまった。周りの者達は一瞬、音が消えた様な感覚に陥り、その後、眼鏡が岩の表面にぶつかるか弱い音が響き渡るまで誰も何が起こったか分か

らなかつた。少し経つて気づいた時にはクローヴが顔を押さえ、うずくまつてすすり泣いていた。一番早く動いたのがマーシュだつた。

「貴様何をやつている！か弱い乙女に手をあげるとは見損なつたぞジン！」

と言ひながらジンに歩み寄つていつたが、冗談めかして言つてゐる様に聞こえるが本人は真剣に言つてゐるのだ。それよりも速くジンの襟を摑んだ者がいた。ロキュアートである。彼はそのまま右の窪みにジンを叩き付けると上から見下ろす様に重たい声を発した。

「殴り込みとはいは案だな・・・これでお前は無関係の人物を傷つけた莫迦野郎になつた。少しほ恥を知れ！」

すると今度はオルガノに向かつてじう言つた。

「お前もそうだ。こいつの悪口を叩いたあげく赤の他人を傷つけさせたんだからな。反省しろ！」

「隊長、一寸。」

先ほどまで黙つていたエスカーが食器を置いて立ち上がる。眼光が鋭い。ロキュアートは眼の中に何かを感じ取つてエスカーについて行つた。薄暗い洞窟は雨の音とすすり泣きの音以外、響くものは無い。オルガノがクローヴの肩を抱き寄せ、頭を撫でてやつた。

「『めんね、あたしのせい』で・・・『めんね』

マーシュが飛んで行つた眼鏡はどこかと辺を探しまわつていたが、マッカレルが首を横に振つた。あまり周りで騒いだり立ち歩かない

方がいい、と。

「隊長、気分悪くないですか。」

エスカーがいきなり切り出した。何だか普通の医者の問診のようだ。ロキュアートが黙つているとエスカーはさらにこう続けた。

「私は悪いです。血圧やら心拍数やらを計つてみましたが、どうやら私は興奮している様です。」

さつぱり何が言いたいのか分からない、という顔をしているとエスカーは傍の海水を顎で示し、鞄を開いた。

「多分あいつの所為です。あの泡はただ者ではないと思います・・・見てて下さい。」

彼が取り出したのは子供がよく使っている簡易ポン普らしき物と中に何か入っている目盛りの付いた細長いガラス管であった。よく飲酒運転の検査に使われるアレである。ただガラス管の色だけが多少違っていた。ガラス管の先を折り取つてポンプに装着。そのあたりの空気を吸い込ませ、しばし待つ。

「・・・やはりそうですね。この泡の正体は炭酸ガス、二酸化炭素です。皆、二酸化炭素の所為で興奮しているんですね。だからこいつ・・分かりますね？」

これは困った事になつた。二酸化炭素濃度がかなり濃い所に寝泊まりしているのだ、彼らは。これでは冷静な判断も治安維持（？）も

出来ないだろ？ 何よりストレスが溜る。一酸化炭素濃度の低いリラックス出来る場所に早急に移った方が良さそうだ。しかしここで移るべきか・・・。

「森林でいいと思いますが？」

ロキュアートの心を読んだ様にエスカーが言つ。

「大体の場所なら分かります。この島に来る途中に見て覚えましたから。」

暫く考えていたロキュアートが頷いた。

「よし。明日なるべく早く移動して1時前には新しくHQを建てよう。今必要なのは休息だ。」

そういうて2人は元の場所に向かつて歩き出した。

戻ってきた2人を迎えたのは雑音にまみれたヘーリングの声だった。

『「マジカレル君？ ロキュアート？」出来たら替わってくれないかしら？』

背後の雑音は騒々しく甲板を動き回る船員の雜踏と豪快な荒波の飛沫で構成されていた。ロキュアートは無線機の前に座つてスイッチを押した。

「どうしたヘーリング？ 隨分焦つておる様だが？」

『莫迦者！・・・今アタシの艦が例の尖つた岩に座礁してね。』

ヘリングが随分と落ち着いた声で報告する。

「おい、大丈夫なのか？」

『ぶつちゃけ一寸マジい。』

「だろうな・・・それにしても随分騒がしいな？」

『浸水が酷くて・・・どうやら止められそうにないね。』

「何を弱気な事言つてるんだ。それよりも・・・」

その時、船体が大きく傾く音が無線機と海から直接伝わってきた。
本当にマズいようだ。

「おい？」

『いやー、嫌な音を聞いちゃつたねえ。聞こえた？』

「ああ。海から直接な。』

『ま、万が一でもみんな泳げるから大丈夫でしょ。』

「そういう問題かよ。』

『ところで』

と言つた瞬間、凄まじい爆発音と大きな炎が海上に上がつた。調査隊の面々が　あの3人を除いて　皆海上を見た。遠くに行つたはずの『ハルバット』がすぐ近くに見える。恐らく炎の所為だろう。それと同時に無線機の向こうからは生々しい声が聞こえてくる。

『船尾左舷側発動機全壊！・・・何なんだ！？』

『メティック！・・・負傷者だ！・・・負傷者の手当をしろ！』

『シャフトシールから浸水！・・・ビルジ許容量を超えてます！』

かなり酷いように聞こえる。

『ロキュアードごめん!』

そう言つとヘリングのブーツの音がして船員たちをまとめ始めた。向こうの通信機には『デュロックが代わりに座つた。

「デュロック、一体何が起つた?」

マッカレルが訊くと彼は周りの状況を見つつ船内の状況を報告してきた。

『左エンジンがヤラれて浸水が酷い様だ。けが人もたくさん出でているが、ど』

2発目。これは大きかつた。1発目よりも派手に炎が上がり船が船の形をしていない。それと同時に無線機の雑音が酷くなり、殆ど聞き取れないという状況になり、またその状況で聞き取つた言葉は聞くに堪えないものだつた。

『メーテー！メーテー！ディスイズハルバット！イースト・・・』

そこで完全に無線が途切れた。沈黙が流れる。

「・・・彼らは優秀だ。皆無事に救命艇に乗つてゐるだろ。今日は寝て明日に備える。」

そう言つとそそくさと寝てしまつた。磁気、一酸化炭素、仲間割れ、船の破壊・・・彼も、その他の者達もそれ以上不幸を感じたくなかつた。だから、皆彼に従つて早々に眠つてしまつた。

「道理でお香が弱いと思つた。」

マッカレルがつぶやいた。デュロックを完全に信じきつている様だ。

次の日、特に変わった事もなく皆一酸化炭素から逃れるために森林に向かつた。しかし、昨日の事が祟つて姿勢も態度もぐだぐだになってしまった。相変わらずあの3人は奇妙な関係を続けているし、クローヴはジンが振り向いただけで視線を逸らす様になつた。唯一、嵐だけは去つて大変に良い天氣だつた。

事が起きたのはHQを建て終わつてからであつた。最初はただ何となくマー・シユが大きく突き出た2～3m位の壘壩状になつてゐる岩の並びの上に立つて周りを見渡す所から始まる。周りには何もない。向こうに見える海が素晴らしい。昨日の嵐が嘘の様だ。

「いいなあ、この環境。」

そう言いながら景色を楽しんでいたが、ふと、何かがこちらに近づいている様に見えた。

「・・・エスカー？何か近づいているぞ。ありや、小型の船か？」

エスカーがちらりと見て答えた。

「イルカかシャチか、そこらへんだろう。見間違いだ。」

そつとつてまた奇妙な薬を作り始めた。

違つたのだ。実際はマー・シユが正しかつた。小型の高速船がこの島に近づいていたのだった。しかし、マー・シユはエスカーの言葉を信

じ、早々にそれを動物と考へる事にしてしまっていた。ほかの者達も自由に過ごしているので、彼も塹壕岩の上に横になつた。クローヴは替えの眼鏡を掛けて何か書いていたし（殴られた傷は何と半日で元通りに治つてしまつた）、ジンは土を穿り返していた（逆にこちらの手の方が治りにくそうな傷だらけであった。と、いうのも、どうやらエスカーが自作のスゴい薬をクローヴにつけてジンには酢酸を塗つたようである）。オルガノはとくと昨日の事でかなり落ち込んでいるようだつた。

大事件はその日の夕方近くに起きた。マーシュが眠りから覚めて岩上で伸びをし、辺りを見回した。

「寝ちまつたのか俺は・・・」

暫くそのままの姿勢だったが、何かを見つけて岩の上に立つた。

「・・・あれは人か？」

やせ形の人間らしき影が遠くに米粒の様にあつた。こぢらに近づいている。

「エスカー、人がいるぞ。こちに来ている。」

エスカーは望遠鏡を取り出してその影を観察し始めた。

「・・・何か持つてゐるな。この島に人間はいないから、恐らく漂流者だろ？。隊長に報告してくる。」

「ほーらやつぱり小舟が・・・」

「「うるせー。」

そう言つて森の中に入つて行つた。人影は段々近づいて来ている。

「手を振つたら氣づくか・・・」

マーシュが手を大きく振ると人影が一瞬止まつた。気づいた様だ。すると鞄らしき物から何かを取り出し、さらに近づいて来る。そこへロキュー・アート隊長と名（マッド？）医エスカーがやつてきた。

「どんな感じだ？」

隊長がマーシュに声をかけるとマーシュは人影を見つつ答えた。

「「うらに来ていますね。どうやら漂流者みたいですが・・・」

突然喋るのを止めた。そして次の瞬間、塹壕口から草原に飛び込んだ。

「敵だ！..」

鳴り響く銃声。音質から言ってM16機関銃の様だ。ロキュー・アートは持つている全てのエネルギーを消費して叫んだ。

「敵襲！..集合して大至急移動開始！エスカーに続け！」

全員、何が起きたかは分からぬ。ただ緊急である事は確かだ。それから30秒以内に全員が集まつた。そこからエスカーの記憶とジンの土地勘を頼りに森を進んで行つた。もうすぐ日が

沈む。やがて大きく開けた荒野の様な所で一行は止まった。

「マズい・・・」ジゅ 田立つな。」

ジンが周りを見渡した。大きな岩が「ロロロロ」としている。岩の影ならやり過ごせるかもしない。

しかし男は早かつた。一発の銃声が響いたかと思つと、エスカーの鞄のベルトが切れ、鞄が地面に落ちた。

「散れ！」

ロキュアートの判断は早かつた。皆一瞬のうちに荒野に飛び出した。ロキュアートは走り続け、マッカレルは窪地に、マー・シユとエスカーは見つかりにくい岩の影、オルガノは何故か森に逆戻り、ジンは土に潜り（さすが地理オタク）、クローヴは高い岩の陰に隠れた。

やがてゆっくりと男の正体が明らかになつた。
整つた良い顔をし、大きな鞄を担いでM16を持つたやせた若い男だつた。銃身が突き出ている所からすると鞄もどうやら普通の鞄ではない様だ。一体何の為にそのような物を持っているのか？

男が周りを見回すと、ふいに岩陰から小石が転がり出てきた。クローヴが隠れている所だ。男は見逃さなかつた。しつかりとした足取りで真っ直ぐそちらに向かつて行く。クローヴはその気配を感じていた。男があと5歩位の所まで迫つた。

「クローヴ！！」

マー・シユが叫んだ。男はそちらに振り向きすかさず銃を発砲、しかしすぐに弾が切れた。クローヴはその瞬間を見計らつて岩の影からマッカレルの方向に全力疾走、しかし男はリロードし

かけていたM16を投げ捨て、大きなナイフを取り出しクローヴの腰に手をかけて強引に自分の方に引き寄せた。結果的に男が社交ダンスの様にクローヴを抱き寄せる形になり、男は持っていたナイフをクローヴの首に当てた。これはもう駄目だと思つて目をつぶつていたクローヴは何も起きていないと実感し、そつと目を開けた。男の視点は大きくずれて薄暗く紅く染まつた空を見ている。口が沈んでいた。周りから見ればパツと見、ロマンチックなシチュエーションだ。

「・・・沈んだ。」

男が中々良い声でつぶやく。

「ふえ？」

クローヴが困惑していると男はいきなりクローヴを突き倒し、自分の腰に付いていた缶の様な物を投げつけた。

「ひやっ」

男は先ほど投げ捨てた銃を拾い、

「退け。」

と言つと全力疾走でどこかに行つてしまつた。その瞬間に缶が破裂し、強力な光と音を放出した。スタングレネードだ。

「！――！」

一瞬にして全員の聽覚と視覚を奪い取つた。

「・・・・・」
「・・・・・」
「会話が全く成立していない。」

「・・・・・」
「・・・・！」
「・・・・か！」

やつと聴覚が復旧してきたが、まだ会話は難しい。

「・・スカー、クロ・・・介抱・・・！」

言葉の断片で理解したエスカーが介抱に向かったが、スタングレネードが目の前で破裂した所為でクローヴは倒れていた。

「・・・つかり・・・ろー！」

瞳孔を見たがどうやら強い光で意識がとんだだけの様だ。

「・・・とりあえず、今は襲つて来ない様だな。」

ロキュアートは男が去つて行つた方を見たが、HQとは反対の方向であった。

「一回HQに戻るぞ。話はそれからだ。」

「何なんだあいつは・・・！」

全員HQに戻ったがクローヴは未だに氣絶しているしオルガノは難聴が続いている。マーシュとジンはどこかに行ってしまった。

「あの男、何でクローヴを襲わなかつたんだ？」

ロキュアートが議題を出す。

「あいつ、日が沈むの見てどこかに行つたんで、多分それが何か関係しているんだと思います。」

マッカレルが答える。

「夜に弱いところとか？」

「はい。」

「・・・ファンタジーによくあるシチュエーションだな。」

「・・・」

話が固まつた所で秀才エスカーが眼鏡を直しつつ解説りしき事を言った。

「日が沈んだから襲つて来ないというのは正しいでしょう。そういうならわざわざクローヴさんを放したりしません。ただ逆に言えば日の出とともに攻撃を再開するとも言えるので、逃げた方が良さそうです。」

そこへマーシュとジンが駆け寄つて来た。手に何か本の様な物を持っている。

「い、今しがたそこで見つけたんだが・・・」

マーシュが本を振つて皆に言つた。顔が蒼白である。

「とりあえず読んでくれ・・・！」

本を受け取つたエスカーが大きな声で読み始めた。

「8月2日、救命艇でこの島にやつてきた。総員22名。中、負傷者2名。未だ連絡取れず。・・・8月3日、宿営場所確保。次は食料の確保を。」

と、このようにこの島での出来事やら何やらを書き綴つている日誌であった。途中までは「ごく普通の状況説明であるが気になるのは段々一部の者が粗暴になつてきただ」という記述であつた。二酸化炭素の影響ではないか。とりあえずそのまま読み進めた。食料確保の為に総出で食料を探しまわつた事、渡り鳥が運良く来てしかも人間に免疫がないから大量につかみ取り出来た事、雑草を食べたらそれが笑い草だつた事。實に色々な事が書かれていたが、最終ページ付近で大きな変化が起つた。・・・同士討ちが起きたのだ。

「・・・最初、一人が幻覚を見たらしく銃を手に取つて乱射した。それにつられた他の幻覚を見た者がそれに答え、瞬く間に広がつていつた。私を含め5人はまだ正常だつたので固まつて森に逃走した。（中略）・・・銃撃戦は終わつたらしく、その場所にもう一度行ってみるとそこは死体が点々としていた。一人、こちらに銃を向けたので正当防衛で彼女の頭蓋を私が自ら打ち抜いた。念のため死体の数を数えておいたところ、しつかり私達も含め22人だつた。」

それから食糧難に陥つて意識がもうろうとしてきた事が記されてい

る。その後とぎれとぎれになつていきなり急な話が始まった。

「・・・何が起きたかは分からぬ。ただ人間がいたので丘の上に立つて手を振つていた者が突然、銃声と共に倒れたのだ。（中略）・・木の陰から見てみると整つた顔をした若い男が銃を持っていた。知らない男だ。それもそのはず、先ほど22人と数えておいたのだから。（中略）・・・ついに私だけになつた。相手は強力な武器を携えている。私の銃なんぞただの豆鉄砲に過ぎない。ところで今私は隠れながら書いているのだが」

「ここの紙に血飛沫が付いて、後に続いた。

「2発撃たれた。横になつて動かないでいたら死んだと思ったらしくどこかに行つた。しかし私は死んでいない。が、長くはないだろう。これを読んだ者、彼は多少強引だ。突き進むだけであるから、それを何かしらの方法で止めれば何とかなるだろう。嗚呼！私の文章は何と雑なのだろう！以上だ。長々とありがとうございました。」

エスカーが眼鏡を直した。

「やはりそうでしたね。」

エスカーが言った。困惑の顔を浮かべている。

「これはもう時間の問題ですね。なるべく早くここから脱出するほかありません。」

ロキュアートが早々に折れた。

「そりだな。調査なんぞやつてる暇は無い様だな。北上してゴムボートで脱出だ。」

「しかし彼は追つて来ます。見た所、私達の移動最高速度は彼の歩行に等しい様ですが？」

「あの、」

にわかにクローヴが声をあげた。随分衰弱している。

「移動しつつ罠を張るというのはどうでしょう。何だか彼は急いでいるというか、焦つているというか・・・そんな感じがします。」

確かに男は急ぎ焦つていた様にも見受けられる。彼女は正しい。

「よし、罠の製作は任せた。ジン、ここは地形に合つ様に仕掛ける場所を検索しろ。以上、明日は日の出前に起きて歩くぞ。寝ひ。」

やはりこの隊長は行動が早い。・・・ちゃんと方法を考えているのか？初めての仕事を請け負ったクローヴははりきつて設計図をものすごい勢いで書き始めた。さすが有名工科大学卒だ。それ以外は皆寝てしまった。と、いうのも、いつまでも起きていると隊長が本気でキレて暴れ出すからである。

「朝ご飯だよお？」

エスカーの聞いた言葉第一声はそれだった。マーシュが田の前にいた。

「・・・起きれないじゃないか。」

「一寸もつと驚いてくれたって良いじゃないか！」

「慣れた。」

「・・・・・」

悲しくなったマーシュは隣のクローヴを起こしかかった。

「クローヴちやーん？朝ですよー？」

クローヴは設計図に抱きついたまま寝ていたが、呼ばれるとすぐに起きた。やはり夜通し書いていたようだ。周りに色々な罫の作り力スがあった。マーシュはこいつにして、今度はマッカレルを起こして行った。

「マッカレル起きてえ？起きろ？起きやがれっ！」

声のボリュームに驚いてマッカレルが飛び起きた。

「ひ〇ーー?」

「ひー・・・何言つてんだ？まー、これで全員起きたな。」

マーシュは伸びをして自分の位置に戻った。何だか眠たそうである。

「眠そうだな。」

エスカーが言つ。

「いやー、昨日隊長にお前が一番早く起きて歯を起こせつて言われてな。きつかったぜ？何せ日が昇つちまつたら殺人鬼が来るだろ？責任重大だな云々・・・・」

「聞いてくれ。」

突然、ロキュアートが話し始めた。かなり殺氣立っている。これがロキュアートの本気モードなのだ。

「時間がないので手短に話す。15分以内にこのHQを置んで島を北上し、その過程でクローヴとジンが罠を設置する。本当は元来た道を引き返したいがそれは出来ない。知つての通り正体不明の人殺しがいるからだ。今日中にこの島から脱出し、そのまま北上し、無線範囲内の船舶に救援および軍の応援を要請する。以上。15分後に移動開始だ。」

説明を受けてそれぞれ仕事にかかつたがロキュアートがクローヴとジンを呼んだ。

「君達には単独行動をしてもらつ。隊が出発してから5分後に罠を設置しつつ追つてくれ。念のために無線を渡しておく。以上。解散。」

しかしながらロキュアートはあえてこの一人を選んだのか。状況からして好ましくない事は明らかである。

「ジン、手伝ってくれ。」

真意は分からない。ただ隊長の命令なので従つしか無い。

「・・・ジン？」

「あと5分だ。」

段々と空が白み始めた。そろそろ続きた。

「・・・・・」

銃を持った男はゆっくり立ち上ると例のバッグを持って歩き始めた。

「・・・・これでよしつと。次はどうに仕掛けましょつか?」

クローヴの罠は糸を張るタイプの物と傍を通つただけで反応する物の2種類でそれぞれ場所によつて使い分けしている。

「次はあの跡陰で良いと思つ。」

ジンがぶつかりぱつに指を指した。なるべく会話しない様にしている。指示された場所に罠を仕掛けながらクローヴが話した。

「・・・・隨分口数減りましたね。」「・・・・・」

「あの事、私は気にしてませんよ?」

「?、昨日は避けていたじゃないか。」

クローヴが微笑む。

「昨日コレを作りながら考えていたんです。いつまでも引きずつては意味が無いかなと。」

「・・・・・」

「はい、出来ました。次は何処にしましょ?」

「・・・すまんな。」

「？」

「莫迦だなあ俺は。」

それだけ言つと先に進んで行つてしまつた。

男は地形のかすかな変化に気づいていたが、やはり思うがままに突き進んでいた。と、足に何かが引っかかった。

「？」

とたんに繩が地面から上がりてきて男は宙づりになってしまった。
同時にエスカーに借りた二トロの爆発音。

「何い！？」

その爆音は少し経つてから隊員全員に聞こえた。

「よし、逃げるぞー！」

あの二人も成功した事に気づいて本部と合流すべく北に走つて行つた。

「どうこう事だ・・・。」

男の方はといふと直ぐにあのナイフを取り出して繩を切つた。

「」こんな物で私の進撃を止めたと思つた。」

「言つた隅から次の罠に嵌つた。

「しつこいんだよ！」

「急げ。大丈夫か？」

ジンがクローヴに言つた。

「ええ、・・・一寸休んでいいですか？」

はつきり言つて休んでいる暇など無いが仕方ない。隅の岩に腰を下ろして水筒を取つた。

「まあいいだらう。かなり歩いたな。ここまで来れば奴も来ないだらう。」

そつ言つて周りを見渡すとやつと今自分が素晴らしい草原のど真ん中に立つていてるといつ事に気づいた。

進む方向を見ると、向こうの岩場の上にひらひら動いている影が見えた。もつすぐ海岸なのだ。ゴールは近い。

「・・・風が良いな。」

「そうですね。」

「・・・・・・」

2人ともしばし海を眺めていた。

「・・・といひで、」

乾いた銃声が響いた。まず1発、もう1発。両方ともクローヴを撃ち抜いたらしい。

「クローヴー！――！」

クローヴが前のめりに倒れた。ジンが抱きかかえる。

「・・・あー、ちょっと力が・・・もつ駄目かもしだせん。」

「莫迦モン――！」

ジンはクローヴを肩に担いで走り出した。海に向かつて全速力だ。

「隊長おお――！」

声が届いたらしく右の点々が動いた。背後からはM16ではなく今度はM63の雨の様な銃声が響いてくる。ちらりと後ろを見た所、かなり怒った顔をした男がいた。ジンは走つた。走り続けた。

「無駄だ。誰も私から逃れられない。」

男はジンとクローヴの姿を見つけるとにやりと笑つて走り出した。一方、ロキュアートはジンの叫びを聞いて動き出していた。

「マーシュ！私と残れ！それ以外は海岸に行つて脱出準備をしろ――！」

オルガノが走り出した。

「行くよ！エスカー、マッカレル！アタシに付いて来な！」

相変わらず元気である。当场を走り抜けるとすぐに海岸に着いた。マッカレルがゴムボートを出す。

「さて……」

マッカレルが言った。

「どうやってふくれさせんんです？かなり時間がかかると思いますが……」

オルガノが少し考えて言った。

「君は根性でやるしかないね。」

そう言つてオルガノが栓に息を吹き込もうとした時、エスカーがそれを止めた。

「氣体が入れば良いんですね？」

そう言つて、あのベルトの切れた（正確には撃ち抜かれた）鞄から色々な薬品を出してそれらを瓶の中に入れ、栓とつないだ。するとみるみるうちにポートがふくれ上がって使える形になつた。

「……と、まあこんな感じですかね。」「でかしたエスカー！」

オルガノがエスカーの頭を撫でようとしたがエスカーはスッと立ち上がつてこう言った。

「私は医者ですから、何かあつた時の為に一寸戻つておきます。」

そうしてまた岩場に戻つた。

「来てますね・・・！」

マーシュがロキュアートに言つた。

「いいか、陰に隠れておけ。来たら一氣に回収して走るぞ。」

相変わらず一人は走つていた。追う者と追われる者・・・男のM63の弾が切れたらしい。銃声が止んだ。

「・れのつロ・ドはレ・・ユーションだつ！」

走つていてよく聞こえないうが、聞こえた言葉はどこかで聞いた台詞だった。やがて岩場にさしかかった。

「ジンー。」

そちらを向いた所、ロキュアートとマーシュがいた。

「ひからだー急げー！」

が、何とそのすぐ隣にあの男がいた。さつきまで遠くにいたはずだが、実際ここにいる。抜け道があるのか。男はジンにG-18Cを向けた。

「やめろおおおおおつつ……！」

ロキュアートが叫んだが、それよりも先に何かの影が田の前をよぎった。マーシュだつた。銃声、呻き、血……。一瞬で事が片付いたらしい。いつの間にかロキュアートが男をつかんでおり、マーシュはそこに倒れていた。どうやらマーシュがジンとクローヴを庇いつつ男を倒し、そこをロキュアートが押さえたという事らしい。

「ためえ……」

ロキュアートは持つっていたロープで男を一気に縛り上げた。

「エースカーーーー！大至急来てくれ！ケガ人だーーー！」

2人とも出血が酷く止まりそうにない。
こちらに向かっていたエスカーが走り出した。

「・・・隊長、もう駄目です・・・。」

クローヴが弱気な事を言つたがロキュアートが怒鳴りつけた。

「何言つてんだ！もうすぐエスカーが来る。一寸待て！命令だ。」

しかし弱り切つたクローヴは息をするのも辛そうだ。

「従えそうにないです・・・。」

すると、マーシュもこちらを向いて言った。クローヴよりも酷い傷だ。

「た、隊長・・・自分も無理みたいです。」

「クソッ！」

確かにもう助からないかもしない。だがそんな思いはさせたくない。何故こんな事になつたのか・・・。そこへエスカーがやつて来た。だが一目見るなり顔を歪めた。

「隊長、無理です。」

「何だと!」

エスカーの答えにロキュアートの怒りが爆発した。胸ぐらをつかむと激しく揺すつて怒鳴りつけた。

「何だその無責任な言葉は!医者の仕事は治す事だろうが!..」

しかし、エスカーは俯いて何かを堪えている様に歯を食いしばつていたが、一声、絞り出した様な声で叫んだ。

「・・・治せないんですよ!..」

ロキュアートがその勢いに圧倒された。エスカーの頬に一筋、流れ物があった。

「・・・治せないんです・・・」

エスカーは最初から手の施し様が無いのを知っていたのだ。だから無理だと言つた。顔を歪めたのも治療が嫌だとか、そんな事では無かつた。仲間が去つて行くのを悲しんでいたのだ。

「・・・单刀直入だな。」

マーシュが答えた。呼吸がつまへ出来なつて本當に辛やうだ。

「無理も無いか・・・また逢いましょう、隊長。この隊・一番好き・・・だったのにあ・・・！」

マーシュがゆづくじと田を開じた。

「おこ待てー!マーシュー・マーシュー・。」

エスカーが田に触つて・・・首を横に振つた。

「ちくしょーーー!」
「・・・ジン・・さん」

クローヴが上半身を起こしてジンを呼んだ。

「何だ? というかそんなに動くな。」

ジンがクローヴを抱きかかると、

「・・・これを・・・」

と言つて懐から何か取り出した。それは、割れた眼鏡だつた。あの時飛んで行つた眼鏡を実は移動直前にマッカレルが拾つてクローヴに渡しておいたのだ。

「・・・今度は・・・女の子・・・殴らない・・・様にして・・・ください・・・ね。」

ジンはその眼鏡を受け取ると、タオルでクローヴの汗や血を拭き始めた。まだ。まだ謝っていない。せめて最後に謝りたい。

「……分かつた。だからもう喋るな。……ごめんな、殴った事。

「……」

クローヴは静かに微笑み、やがて彼女の重さがなくなつた。

「おークローヴークローヴーーー！」

少しの間の沈黙。その後、ロキュアートが皆に言つた。

「海岸に全員つれて移動だ。その莫迦もつれてけ。」

「そろそろ貴様の正体を教えてもらおうか？俺の部下を2人送つた貴様は誰だ！？」

海岸に着いたロキュアートが男に言つた。男は隊員に囲まれて黙っている。オルガノは妹の様に可愛がつていたクローヴを失つた深い悲しみに浸つており、呼びかけても返事が無い。マッカレルは何かを唱えながら持つて来て一度もまともには使えていなかつたお香を炊いていた。

「落ち着いてください。私が尋問しましょ。」

エスカーが近くの岩に座り直して言った。彼は会話の能力も高いのだ。しかし、いつものキレが無かつた。

「まず名前を訊くか。貴様、名前は。」

「ギザルドだ。」

男は悪びれずに素直に答えた。

「随分落ち着いているな?」

「もう捕まつた。黙つておく必要は無い。だがまさか盗賊に捕まるとはな。今まで捨て身で襲いかかつてくる奴なんぞいなかつた。全員、他人の事なんぞ考えていなかつたからな。」

そこで全員、男を見た。マッカレルも唱えるのを止めてそちらを向いた。

「盗賊?」

「違うのか?」

ギザルドが驚いた顔をして皆の顔を見比べた。

「無人島だろう。それに我々はれつきとした調査隊だ。」

「・・・知らないのか。」

男は立ち上がると、こんな事を言つた。

「この島は僕の先祖から代々引き継がれている金庫だ。僕の先祖は倭寇だつた。彼らの集めて来た財宝やら何やらをこの島に保管して他の盗賊に奪われない様にせよ、というのが一代目の遺言だつたら、それからこの島には色々な仕掛けが施されるようになった。まづ鋭く尖つた岩。あれで大型船の侵入を拒みそれぞれの岩は磁気を

含んでいて羅針盤を狂わせる。それから南は炭酸の出る岩で盜賊の士気を低下させ島にある植物はほぼ全て毒を持たせた。トリカブト、マジックマッシュコルーム、テトロドтокシン・・・特にサイケ系の麻薬草なら同士討ちさせる事も可能だ。極めつけは抜け道で盜賊との距離を一気に縮める事が出来る。他にも色々とあるが。」

まさか。それが隊員達の思つた事だつた。つまりこの男はこの島の管理人で侵入者を排除しているという事か。しかしそれなら噂にもなつていいはずだが・・・いや、この島に侵入した者は全てこの男に排除されて一度と帰つて来ない。それなら噂も立たない・・・。

「聞きたい事がある。」

マッカレルがいきなり声を出した。その目は怒りで赤くなっている。

「船を、『ハルバット』を沈めたのも君か？」

「ああ、そうだ。TNTとC4を使つたが今回はまく爆破が出来なかつた。」

即答だつた。そこでいきなりオルガノがギザルドの胸ぐらをつかんで吊るし上げた。

「あんた本当に人間か！他人の命を奪つてこの島を守る？ふざけんなっ！そんだけの事やるぐらいこの島は大切なの！？人の命は何物にも代えられないとても大切なモノだろうが！」

しかしギザルドは首を押さえてもがきながら答えた。

「・・・仕事なら、手段は選ばない」

オルガノの怒りが頂点に達した。ギザルドを地面に叩き付けるとそのまま殴りかかると拳を振り上げる。しかしそうでその腕を止める者がいた。ジンである。

「もう止せ。構うな。」

しかし大人しく話を聞くオルガノではない。

「放して！放してよつ……」

「・・・止める。殴るうが何しようが変わらない。」

「放してえつ……アンタだつてこの男……」

ジンがそのつかんだ腕を持ち上げてそのままオルガノを海に放り込んだ。

「もう止める……何も変わらん。」

海に投げられたオルガノはそこで泣き崩れてしまった。ロキュアートが号令をかけた。

「全員、集合しろ。」

ジンがオルガノの肩を優しく支えて帰つて来る。オルガノは今にも崩れてしまいそうだ。

「2分後にこの島を脱出だ。以上。男もつれてけ。」

全員船に乗り込み終わって、ロキュアートが出発の合図をした。船が海岸から3m離れた所でロキュアートがギザルドに言った。

「さて、貴様とはここでお別れだ。」

ギザルドは彼が何を言っているのか分からなかつた。が、ジンに襟をつかまれ海岸に放り込まれて気づいた。彼らはギザルドを島に残すつもりなのだ。彼に向かつてジンがこう言つた。

「そこで暮らせ！俺たちは仲間を殺された復讐をお前にはしない。無意味だからだ。復讐をすれば、その時だけ心が晴れるだろうが、その後の人生に後悔という暗い影を持つて行かなくてはならない。そんな事はしたくない。もう、これ以上誰かが傷つくのを見たくない。たとえそれが憎い者だったとしても、そいつの命を奪う事なんか、絶対に出来ない。そいつも命が、人間としての命があるんだからな。」

不意にエスカーが何かをギザルドに投げた。・・・それはあの時のスタンングレネードの缶だった。

「君にも人間の心があるんじゃないか？でなければこんな非殺傷武器なんぞ使わない。今思い出したが、『日が沈んでから襲うべからず』というのが倭寇のとある一派の掟であつたと記憶している。だつたら、その掟を守る人間としての心、徳を持ち備えているという事だ。もう止せ、こんな事。親や先祖が間違っていたり、悪かつたりというのはよくある事だ。」

そう言つと夕暮れの海を出て行つた。

「なあ。」

ジンがエスカーに言った。

「何だ。」

「俺はキレる事の無意味さに気がついたよ。」

「・・・」

キレたって仕方ないじゃないか。

そいつにはそいつの意見、俺には俺の意見があるんだからな。
だから何か言われたとき、キレて人を殴るんじゃなくて、
ただ単に言い返せば良いんじゃないかな?

謝るってのも大事だよな。

自分の悪い事を素直に認めて、誤解も解けて。
要は自分勝手になるなって事だよな。

相手の意見を取り入れて自分を成長させて行く・・・少し難しいが
やらなくちゃな、

クローヴはそんな奴だった。

でも何で今の若者はそれが出来んのかな。

「そうだな。」

黄金色に光る海を見てエスカーがつぶやいた。

第一部終。

第一部、追う者。（後書き）

お疲れ様でした。いやー、疲れた・・・。第一弾進行中です。「次回作も期待しちゃな！」b.yへリング。あれ？何でへリングがここに・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9783d/>

島

2010年10月31日13時28分発行